

イフタフヤーシムシム

テレビをつけていたら、懐かしいお遊戯に再会した。

敬老の日特集らしく、幼稚園生が老人ホームで、お遊戯を披露していた。

小さな両手を合わせ、閉じたと思ったら、ぱっと開く。

何度もその動作を繰り返し、ぴよんぴよん、とび跳ねながら歌っている。

お隣のお嬢ちゃんが、この部屋で何度も何度も踊ってくれたものだった。

老人ホームのお年寄りもあの時の私同様、「開けゴマ」と歌っているとは全くわからず、それでもここにこと手を叩いているに違いない。

あのおまじないに出会ったのは、もうずいぶん前のことだった。

インターホンが鳴って、ドアを開けると、お隣のお嬢ちゃんがひとり、立っていた。

「遊びに来たの」

と私に言う。

驚いた。

「下の子は変わっていて」とお隣の奥さんがぼやいて

いたことを思い出し、なるほど私は納得した。

「じゃあ、どうぞ」

と、小さなお客さんを家に招き入れた。

二人でこたつに入り、みかんを食べた。

みかんを食べ終わったところには緊張も解け、お嬢ちゃんの名前がさらということ、私は知った。

幼稚園の話もしてくれた。

習ったばかりのお遊戯まで、してみせてくれた。

あの「開けゴマ」の踊りだ。

踊りながら歌うから、なんと言っているのか、私にはさっぱりわからない。

しかし、さらちゃんの踊りを見ていると、なんだか楽しくなった。

「さらちゃん、何て歌っていたの？」

踊りが終わり、満足そうにお菓子を食べ始めたさらちゃんに、私は尋ねた。

お菓子がこたつの上から消えた頃、私はようやく、アリババと四十人の盗賊のお話の踊りだということを理解した。

「おばちゃんに教えてあげる」

と言われ、実はあの時、私も踊ったのだ。

まだ私も若かったものだ。

それでもけっこう息が切れた。

最後に大声で叫ぶ「イフタフヤーシムシム」は、摩訶

不思議な言葉だった。

「さらちゃん、そのイフタフヤーシムシムってどういう意味なの？」

と聞いても、さらちゃんは

「知らない」

と、つれない返事だった。

一時間ほど我が家で遊び、私はさらちゃんを連れてお隣に行った。

ドアを開けると、コート姿のお母さんが血相を変えてこちらに走ってきた。

「さら、あんたどこに行っていたの。お母さんがどんなに心配したと思うの」

驚いたのは私で、心から謝った。

二人でみかんを食べ、呑気にお遊戯をしている間、お母さん仲間が必死で、さらちゃんの搜索をしていたとは。

私の説明を聞いて、今度はお隣の奥さんが私に謝る番だった。

「すみません、かつてによそさまのお宅にあがりこむなんて」

大人が大騒ぎしているのを、当の本人のさらちゃんはしばらく見上げていたが、すっと通り過ぎて行った。

「さらっ」

呼びとめようとしたお母さんの声は、くたびれたのか、力がない。

大騒ぎも一件落着して自宅に戻った時、私はおまじないをひとつ憶えた。

アラビア語の「開けゴマ」

語感の良いこの言葉、私は今でも時々口にする。

「おばちゃん、ゴマは莢からこんな風に飛び出してくるんだよ」

お遊戯の振付をして見せながら、さらちゃんは、幼稚園で習ったことを、私に教えてくれた。

「ゴマが大きくなるとね。」

莢が、もう出ても大丈夫だよって開けてくれるんだって。

だから、ゴマはぽんっと飛び出すんだよ」

さらちゃんの言葉は、夫を亡くしたばかりの私の心に響いた。

苦しいことがあると、私は「イフタフヤーシムシム」とつぶやく。

ぐずぐず考え過ぎなくても、大丈夫。

時期がくれば、莢は開くものだ。

私の体は小さなゴマになって、莢からぽんと飛び出してくれる。

さらちゃんは大きくなって、今はママになっていると

聞いた。

さらちゃんの子どもだから、また変わり者かもしれない。

隣のおばさんの家に、遊びに行っているのだろうか。ママになったさらちゃんは、自分がかつてそんな子どもだったなんて、素振りも見せていないに違いない。もうすぐ人生のお迎えがくるこのごろ、私はあのおまじないを時々唱えている。

お遊戯は忘れてしまったし、踊りたくても、ちよつと無理だ。

しかし、楽しい響きは忘れていない。

お隣の小さなお嬢ちゃんが教えてくれたおまじない「イフタフヤーシムシム」。

年老いた体から、私がぽんと跳び出していきますように。